

〔南山大学〕

社会に開かれた大学を目指して —人類学博物館の小・中学生向け講座—

奥田 隆明 南山大学副学長

はじめに

南山大学は1946年に開学した南山外国語専門学校を前身とし、2021年に創立75周年を迎える8学部18学科、6研究科を擁するカトリック系ミッションスクールである。「キリスト教世界観に基づく学校教育を行う」を建学の理念とし「Hominis Dignitas(人間の尊厳のために)」を教育モットーに掲げる本学は、社会に開かれた大学としてその研究成果を地域へ還元し、生涯学習の一助とするため、2005年度より連続講演会を開催することとした。当初は高校生から社会人、シニア層を主な対象とした講演会であり、いずれも多数の聴講者を迎え、社会貢献

の一翼を担う企画となっていた。一方で、本学では生涯学習を目的とした一般向け公開講座「南山エクステンション・カレッジ」を開講していたこともあり、2009年度から本講演会を、若年層への教育に目を向け、普段大学へ足を運ぶことのない小学生から中学生を対象に将来の学びを考える機会を提供することを目的とした体験型の講座とすることとした。

1 本学における「小・中学生向け講座」の特徴

本学が開講する「小・中学生向け講座」は、大学の施設や特色を活用し、日ごろ小・中学校では体験できない学びを与えることに特徴がある。具体的には、①本学が所有する人類学博物館にて実際に展示物に触れながら考古学を学ぶ講座、②主に法務研究科(法科大学院)で使用する、実際の法廷を模した法廷教室にて模擬裁判を体験する講座、③多文化交流ラウンジにて留学生と交流しながら異文化を学ぶ講座などが挙げられる。開講時期を小・中学校の夏期休暇期間に設けていることもあり、自由研究のテーマとしても需要が高く、いずれの講座

も反響が大きい。とりわけ人類学博物館にて行われる考古学講座については一段と人気が高く、毎年、募集定員の倍以上の参加申し込みがある。

2 人類学博物館を利用した講座

1949年より人類学研究所を有する本学は、収集した史料や研究成果を学修・研究に利用するのみならず、生涯学習を推進するため「南山大学人類学博物館」として広く一般に開放している（現在は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため一部入館を制限）。ユニバーサル・ミュージアムを目指す本学の博物館は、その展示物の殆どに触れることができる特徴を持っている。「小・中学生向け講座」ではその性質を生かし、縄文土器、世界各国の民族学史料に触れながら、博物館の利用方法を学ぶとともに考古学への知的好奇心を刺激する講座を開催している。講座の一部には保護者の参加も認めているが、時には我が子よりも熱中する姿が見られることも少なくない。

3 今後の展望

「小・中学生向け講座」は、どの講座も定員を大幅に超える申し込みがあり、需要の高さがうかがえる。2019年度講座終了後のアンケート調査においても、約94%が「満足」と回答し、約78%が次年度への参加を希望したことからも、継続事業としての期待の高さが感じられる。大学の施設を利用し体験することで、研究成果の社会還元だけでなく、南山大学へ親しみを持ってもらうことにも貢献しており、大学の広報的観点からも効果が大きい事業となっている。新型コロナウイルスの影響により昨年度は開講中止となったが、社会に開かれた大学として、地域貢献となり得る貴重な事業を今後も継続していければと考える。



人類学博物館の小・中学生向け講座

[芝浦工業大学]

「オープンテクノキッズ」が果たす役割

山下 修 芝浦工業大学地域連携・生涯学習企画推進課課長事務取扱

1 子ども向け公開講座のはじまり

今回は、本学の子ども向け公開講座「オープンテクノキッズ」にスポットを当てていただいた。本学の子ども向け講座は、結構歴史がある。1984年に港区教育委員会からの依頼で「小学生向けの工作」（アルミ板を使ったロボット製作講座）を引き受けたことがその始まりである。

以降「ロボット製作講座」は、2000年度において「ロボットセミナー」と名称を変え、2019年度をもって活動を休止するまで、本学オリジナルの教材により、全国主要都市および海外（マレーシア・ニューヨークなど）において展開。受講者数は、のべ3万人以上を数える。

2 ロボットセミナーからオープンテクノキッズへ

このロボットセミナーのコンセプトは、「組み立てる」、「試行錯誤する」、「独自の工夫をする」いうことであった。これが関係者間で脈々と引き継がれ、多くの子どもたちが「モノづくり」を通じて、創意・工夫をすることの楽しさを学んだのみならず、工学系という進路選択への興味・関心を少なからず志向する契機となった。

ロボットセミナーの教育効果・人気に着目し、講座の一つに取り入れてスタートしたのが「オープンテクノキッズ」である。2009年度から様々な講座をシリーズ化し、展開している。

3 オープンテクノキッズの企画と運用

本学の一般向けの公開講座は、「オープンテクノカレッジ」と称して、年間30本程度の講座を開講している。一方、子ども向けの「オープンテクノキッズ」は年間で10本程度の開講数である（いずれも通常年度の実績）。

本学には、「地域連携・生涯学習センター」という教職団体組織があり、同センターで一般向けおよび子ども向けと

も講座の内容を企画し、事務方がその運用を担っている。子ども向けの講座を企画するにあたっては、

- ・STEAM教育の理念を取り入れたものであること
 - ・子どもの興味をそそる時代のトレンドであること
 - ・本学の学びと研究のルーツや延長線上にあること
 - ・何にしる子どもたちが面白いと感じること
- などを意識して、企画の発案や講師の人選を行っている。

4 オープンテクノキッズの実際

2020年度前期の公開講座は、コロナ禍によりすべての開講を見合わせざるを得なかった。後期においても対面の講座は無理であったが、オンラインでの開講を可とした講師については、Zoomによる配信を行った。主な子ども向けオンライン講座は左記のとおりである(子ども向け講座は、原則として親子で受講)。

①SDGsを学ぶ教室〜地球を守るため、クイズに挑戦してモンスターを倒そう

講師：本学システム理工学部環境システム学科教授

(受講生34組)

②なぞとき土木実験〜液状化実験を見てみよう

講師：本学工学部土木工学科教授(受講生40組)

③Arduinoを使ってプログラミングに挑戦!

講師：本学工学部電気工学科教授(受講生15組)

④親子で学ぶ測量実習〜21世紀の伊能忠敬になってみる

講師：本学工学部土木工学科教授(受講生24組)

⑤おうちで工作教室〜大学生とキャンドルを作ろう!

講師：本学学生団体(受講生20組)

5 オープンテクノキッズの今後

今回、トライアル的にオンラインによる公開講座を開講し、いささか驚いたことがある。小学校低学年のレベルからZoomのオペレーションは、親の助けを借りずとも、ほとんどの受講生が何の問題もなくできていた。これは、今後の講座の企画・運営に大きな手応えとなった。

今後我々が「オープンテクノキッズ」に期待する役割や効果であるが、昨年度後期の実験系の公開講座の最後に、小学4年生ぐらいの男の子から出た質問に凝縮されている。講師の話や実験がよほど面白かったのだろう。

「先生、僕は芝浦工業大学へ入れますか?」

[東洋大学]

特長を生かした独自性の高い広報

東洋大学オリンピック・パラリンピック連携事業Webコンテンツ

「妖怪 meets SPORTS」

東洋大学総務部広報課

はじめに

2020年1月、東洋大学公式Webサイトにおいて「妖怪 meets SPORTS」を公開した。妖怪とともに五輪競技の魅力を紐解くという企画を実施するに至った経緯やその内容を紹介していきたいと思う。

1 東洋大学と五輪

本学と五輪の関わりは深く、1964年に開催された前回の東京大会では、本学の短期大学観光科が選手村食堂で食券係や配膳サービスなどを担当、体育会自動車部が選手・役員の選手村と競技会場間の輸送業務に携わるなど、五輪運営に関わっていた。

また、直近の夏季五輪である2016年のリオ大会では、競泳の萩野公介選手や陸上競技の桐生祥秀選手など、多数のオリンピックを輩出してきた。そして、東京大会に向けては、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と大学連携協定を締結し、本学におけるオリンピック・パラリンピック連携事業の一環として、「妖怪 meets SPORTS」を展開した。

2 なぜ「妖怪×スポーツ」なのか

企画を検討していた2019年、すでに五輪競技を解説するWebサイトは多く公開されていたが、本学ならではの特色・独自性があるコンテンツにするにはどうすればよいか。そこで発想したのが創立者の井上円了であり、「妖怪」である。

1887年、明治時代に本学を創立した哲学者の井上円了は妖怪研究の第一人者であり、「妖怪博士」と呼ばれていた。円了が生きた明治時代、幽霊や人魂など生活の中で経験する不思議な現象は「妖怪」によるものだと考えられており、そこで円了は合理的・実証的な精神に基づき、

妖怪や迷信の実体説明を目指したのだ。明治時代に日本で流行していた「ごっくりさん」の謎を科学的に説明したのが円了であることは広く知られている。

このように、大衆を根拠のない迷信から解放し、自ら考える姿勢を身につける「哲学の第一歩」として妖怪研究を行った円了。2019年は没後100周年という節目の年でもあったため、円了の志を顧みるとともに、スポーツの世界にも存在する「根拠のない迷信」を妖怪とともに紐解き、その魅力を発信していく企画を立案した。

3 妖怪とともに五輪・スポーツの魅力を紐解く

ここで、公開しているコンテンツの一例をご紹介します。日本各地の山や湖を作ったと言われている妖怪「だいだらぼっち」は、民衆の生活を助けるために山や河川を動かしたという伝承が各地の風土記に記されている。このような民話は、古来の日本における「国づくりの神」への信仰がきっかけとされているようだ。そして、大昔の人々の神に対する厚い信仰心が、人々の思い込みによって巨人として表象され、山を簡単に動かすほどの怪力を持つ妖怪へと変化

していったと言われている。(参考：村上健司『妖怪事典』毎日新聞社、2000年)

だいだらぼっちが人の思い込みによって巨人の姿になったように、怪力でイメージされる五輪競技の「ウエイトリフティング」にも思い込みが存在する。腕の力でバーベルを持ち上げる競技と思われがちだが、実はウエイトリフティングに求められるのは「総合力」。全身の重量を支える脚力、美しいフォームを完成させるための柔軟性、一瞬で持ち上げるためのスピードなどが必要になる繊細な競技なのだ。

創業者である井上円了が研究した「妖怪」と、近年の科学的アプローチの発展が著しい「スポーツ」を掛け合わせ、そこに教員や運動部の指導者・学生による解説を加えることでより知見を深められ、本学の創業者や特色についても感じられる内容として、ぜひ本学の「妖怪 meets SPORTS」をご覧ください。楽しみながら妖怪と五輪の魅力を発見していただきたい。



妖怪 スポーツ 🔍